業務密着ルポシリーズ
現場力
FILE 38

東北地方の生命線を地域・民間と共につないでいく

東日本大震災で被災した人々の生命線として活躍した東北地方の国道。震災の教訓を生かし、安全安心を守る道路の整備が本格化しています。復興道路・復興支援道路の工事現場を動かす二人の建設監督官を紹介します。

東北地方整備局
三陸国道事務所

災害時にも寸断されない「三陸沿岸道路」の整備

宮城県仙台市から青森県青森市までの太平洋沿岸を結ぶ国道45号は、東日本大震災による津波で浸水し、通行止めとなった箇所も数多くありました。東北地方整備局では、大規模災害が起きても寸断されない強靭で信頼性の高い道路ネットワークを構築すべく、復興道路の「三陸沿岸道路」を整備しています。

岩手県宮古市を拠点とする三陸国道事務所では、三陸沿岸道路のうち、山田町から洋野町までの8区間108㎞を整備しています。津波で浸水したエリアを迂回するように計画されていて、完成後は災害時の緊急輸送や救急搬送のルートとして活用されます。また、八戸、宮古、釜石といった沿岸部の中核都市をつなぐことから、経済の活性化にも寄与することが見込まれています。

三陸国道事務所が整備する区間の一つに山田町と宮古市を結ぶ「山田宮古道路」があります。現場の責任者である建設監督官を務めるのは佐々木博樹。

「私は平成4年の採用ですが、最初に着任したのがこの三陸国道事務所でした。震災時は岩手県盛岡市の岩手河川国道事務所に勤務していて、リエゾン（災害対策現地情報連絡員）として大船渡市に入りました。津波の後に沿岸部の光景を見た者であれば、復興のために何かしたいと思うはずです。思い入れのある三陸沿岸の復興に携わることができ、やりがいを感じています」

建設監督官の仕事は主に、工事現場で計画通り施工が行われているかを管理することです。工事は設計図面に沿って発注しますが、実際に始めてみると設計図通りには進まないことがほとんどです。現場の状況に合わせて工事計画や工法の変更を判断しますが、費用は予算内に収めなければなりません。

地域住民との対話を重視

佐々木が担当する山田宮古道路の総延長は約14㎞。三陸地方は急峻な地形のリアス海岸ですが、この道路が通る地域は比較的地形がなだらかで、水田が広がる平地もあります。しかし、それは道路を整備する地域に住宅地が広がり、人々の生活が営まれていることを意味します。

山田宮古道路の工事現場の変遷。住民の生活エリアも通過するため、付近の景観は劇的に変化する。写真の現場では丘陵を切り開き、その土砂を盛土しながら平野部を整備している。

「工事ではトンネルを掘り、丘陵を切り開きます。掘り出した土砂は平野部の道路をかさ上げする盛土などに使いますが、同じ工事現場内で使用できるとは限らず、土砂を運搬するダンプトラックが狭い生活道をひっきりなしに通ります。地域住民の方々の理解と協力なしでは工事は成り立ちません」

佐々木は平成25年4月の着任以来、地域の民生委員の集まりに出席してきました。その地域の工事を手がける施工業者も同席します。工事の進捗を丁寧に説明し、何かあれば自分の携帯電話に直接連絡してほしいと呼び掛け、住民と顔の見える関係を築いてきました。

また、定期的に住民宅を訪ね、直接声を聞き、改善を重ねてきました。このような積み重ねが、苦情のほとんど

施工業者と共に民生委員の集まりにも参加する。民生委員は地区の区長を務める方も多く、地域住民のまとめ役としても協力してくれている。

佐々木（左）が担当する工事現場のすぐ脇には住宅地が広がる。トンネル掘削用の火薬を仕掛けるときは事前に連絡するとともに、定期的に住民宅を訪れて工事への要望を聞く。

国道45号沿いにあるショッピングセンターの駐車場に設けられた「三陸復興みらい館」。山田宮古道路に関する情報を地域の人々に伝える情報センター。施工業者で組織する安全連絡協議会が運営している。

ない現在につながったのではないかといいます。

「今では苦情どころかアドバイスをいただけるようになりました。また、施工業者の努力も大きいと思います。大雪が降ったときは地域の小学校へ自発的に行って除雪をした建設会社もありました。住民との間にコミュニケーションが生まれたことで『もう少しだから我慢しよう』と思っていただけているようです」

この他にも、工事現場内での小学生のマラソン大会、観光協会や幼稚園と協力した「こいのぼり大会」、トンネル貫通式での伝統芸能披露など、数多くのイベントで住民との交流を図っています。

「地震と津波、その後の避難生活の体験は子どもたちにとってはつらい記憶となっているはず。道路を整備するだけでなく、その過程を通じて楽しい記憶も共有し、心の復興にも尽力していきたいと考えています」

宮古市の生命線 国道106号

沿岸の宮古市と内陸の盛岡市を結ぶ道路の整備も進んでいます。東日本大震災が発生したとき、被災地である宮古市へ救援物資を届けられたのは国道106号が機能していたからです。この宮古市の生命線とも言える国道106号をより安全安心に利用できるよう整備しているのが復興支援道路の「宮古盛岡横断道路」です。

北上山地を越える国道106号は、急峻な地形のため急カーブや勾配がきつい坂道の区間があり、冬期はスリップ事故などの危険性が高まります。ひとたび事故が起きれば宮古市と盛岡市を結ぶ道路は寸断されてしまいます。実際、過去5年間に75回の通行規制が行われており、そのうちの半分は全面通行止めとなり、市民生活に大きな影響が出ています。宮古盛岡横断道路はこういった危険性の高い区間を回避し、トンネルと橋梁でつなぎながら、

ドリルジャンボは、火薬を仕掛けるための孔を岩盤に開ける重機。火薬を仕掛ける足場としても活躍する。

庄司が担当するトンネル工事の現場。基本的には火薬で岩を砕き、土砂を運び出してトンネルを掘り進める。岩の硬さや亀裂の状態によって適切な火薬の量や間隔を調整するが、その判断は難しい。トンネル工事が「経験工学」と呼ばれるゆえんだ。

掘削現場では多量のちりが舞い、数十メートル先がかすむ。トンネル入口に構えた送風管は、1分間に2,000㎥の空気を処理できる空気清浄機の役割を持つ。

険しい地形を通り抜けていきます。

総延長約100㎞の宮古盛岡横断道路のうち、宮古市側の約33㎞が三陸国道事務所の整備する「宮古箱石道路」。建設監督官を務めるのは中国地方整備局からの応援職員で、平成27年4月に着任した庄司彰です。

「震災から5年。復興の道路整備が劇的に動き始めた今、建設監督官として着任した使命をしっかり果たす覚悟です。復興に貢献するのはもちろん、これだけ数多くの工事現場で経験を積める機会はありません。土木屋冥利に尽きます」

閉伊川に架かる橋梁の工事現場。この橋梁は三陸沿岸道路の一部である「宮古田老道路」の橋で、河川・道路・鉄道を越え、丘陵部を切り開いて整備する道路とつなげていく。工事を一望できるこの高台は庄司のお気に入りスポットだ。

民間との役割分担で現場を回す

庄司が担当する宮古箱石道路では、現在4つの工区があり、7本のトンネル工事が進められています。一般的に建設監督官は2～3年で勤務地が変わり、その間に2～3本の起工式や貫通式に立ち会えれば、大仕事を成し遂げたと言われるといいます。その数からも庄司の担当するトンネル工事の数がいかに多いかが分かります。

「これだけの大規模な工事ですから、私一人では管理できません。トンネルの岩質判定など、費用や安全性を左右する重要な判断は私が行いますが、それ以外の細かい業務は事業促進PPPの技術者に任せています。役割分担ができているからこそ、これだけ多くの現場を回していけるのです」

事業促進PPPとは官民パートナーシップ（Public-Private Partnership）の略。早期復興を目指し、限られた職員で迅速に道路整備を進めるために民間の技術者チームが参加しています。庄司は「優秀なPPPのスタッフにうまく仕事を振り分け、連携しながら全体をマネジメントするのも私の仕事」と語ります。

宮古箱石道路では2カ月に1回程度、全工事現場の施工業者の代表が参加して安全パトロールを実施します。庄司はパトロールで訪れた各現場の安全対策を評価するとともに、各施工業者に対しては「良い取り組みは持ち帰って実践してほしい」と促します。

「最近は宮古箱石道路工事関係者同士の結束も強まっています。私は発注者側の人間ですが、工事を円滑に進めるには、受注者の立場で物事を考えることも大切であると思っています。受け入れられること、できないことの線引きをしっかりしながら、信頼関係を築いてきました」

東北は「復興の本番」へ

佐々木、庄司の両建設監督官は異口同音に東北の復興はこれからだと強調します。

「道路整備というハード面と並行しながら、ソフト面での復興にも力を入れなければなりません。全国から知恵を借り、雇用の活性化や交流人口の拡大を図ったり、インフラを活用しながら、三陸の風土の素晴らしさを伝える方法を考えたりしなければならないと思います」（佐々木）

「東北の復興なくして、日本の発展はありません。国土の整備が地方の経済活性化と復活の起爆剤になれば、日本全体のモデルケースになるはず。そのためにも、完成した道路をどのように活用するかが鍵です」（庄司）

被災地の生命線として完成が待たれる復興道路と復興支援道路。整備が本格化した今だからこそ、確実にやり抜くとともに、完成した後のビジョンを描き始める必要があるのです。

三陸国道事務所
建設監督官
庄司 彰

三陸国道事務所
建設監督官
佐々木博樹

地域の保育園児たちの見学会。大人を含めたあらゆる年代の人に現場を知ってもらう努力が続いている。